

ささえる力

Power

「ささえる力 Power」は、情熱と誇りをもって働く「人」にスポットをあて水資源機構の仕事を紹介するコーナーです。

果敢に前進

～元文系女子が目指す一人前の土木技師～



入社のきっかけ

入社2年目の小助川。日々の仕事は彼女にとってチャレンジなものである。と言うのも小助川、生粋の土木女子かと思いきや、さにあらず。学生時代は文系で、環境や食糧自給といった問題を学ぶため環境社会学を専攻した。そんな彼女がなぜ水資源機構の土木職の道を選んだのだろうか。

「学生時代は環境をベースに学び、農業や水との関わりについても学びました。ですから、漠然と環境や食に関わる仕事がしたいと考えていました。」と振り返る。就職活動を始めた当初は食品メーカーや種苗会社などを中心に回っていた小助川。水資源機構の存在は就職情報サイトの検索で知り、すぐに事務職に応募した。選考過程で課された小論文では、環境についての自らの思いの丈を精一杯書き綴った。その想いは意外な形となって実を結ぶ。

「土木職に興味はありませんか？」

突然のオファーに、戸惑い、そして心はぐらぐらと揺れ動いた。別の会社の内定もあった。どうしよう、悩みに悩んだ。そんな彼女の背中を押したのは土木に携わる父親からの言葉だった。

「きっと大丈夫、何とかなるよ。」

Profile

豊川用水総合事業部 管理課

小助川 真紀 Maki Kosukegawa

平成27年4月、水資源機構に入社。豊川用水総合事業部大野管理所に配属され、平成28年4月より現職。



自覚した仕事への責任感

水資源機構への入社を決意した小助川。見知らぬ土木の世界へと飛び込んだものの、最初は用語や理論など初めて見聞きするものばかりで、右も左もわからなかった。もちろん、いきなり通用するほど現実甘い

ものではない。そんな彼女の挑戦に対し、仕事を丁寧に教えるなど周囲は優しく見守った。先輩職員の優しさ、頼もしさを噛み締めながらも、自ら調べ、ときに教えを請うことを日々繰り返し、今では仕事の進め方を自分なりに考えられるまでになった。



今年度は仕事の内容も勤務地もがらりと変わり、水質管理や管理年報の作成といった仕事では事務所の主担当を任されるまでになった。先輩職員の背中を追って、サブに徹した昨年度とはまったく異なる。データを整理していたある日、細かな数字の誤りに気づく。「放っておくわけにはいかない。」と即座に感じた。すぐに上司に報告し、正しいデータを携えて詫びに回った。幸い大事に至らなかったが、たった1つの誤りがデータ全体を誤らせてしまう。ひいては、データを利用する外部の関係者をも巻き込みかねない。自らの仕事の良し悪しが水資源機構や事務所の信用に直結することを学んだ。だから、小助川はこう自覚する。

「事務所を代表して仕事するという責任の重さを感じます。豊川用水の看板を背負っているような、そんな気持ちです。」



技術者魂の胎動

施設が止まってしまったら、その先に必要な水はどのようになるのだろうかと考えることがある。水の大切さ、ありがたみについて、しみじみと感じるようにもなった。この夏の渇水対応では、「どうしたら利水者が誰ひとりとして、水のことで我慢しないで済むのだろう。」と配水操作の方法を徹底的に考えた。ふとあることに気づいた。興味深いことに、小助川の思考は水資源機構の技術者が異口同音に語ることそのものなのだ。

少し前まで学生だった小助川だが、その胸のうちには今や水資源機構の技術者としての魂が静かに胎動する。まだまだ勉強不足と自戒するように、一人前の技術者と認められるには数多くの努力とたくさんの経験が必要だ。「今後も水質など、何かしら環境と関わる仕事に携わりたいです。」と語るその眼差しの先に、小助川はいつかこうありたいと願う技術者としての自身の姿を見据える。

水資源機構を目指す皆さんへ

一 水資源機構の魅力を教えてください。

必要なときに休暇を取得しやすく、産休・育児休業制度なども整備された子育てのしやすい職場で、女性に優しい会社だと思います。また、それぞれのアイデアが尊重され、個性を発揮できるところが魅力です。

一 就職活動中の学生さんに

エールをお願いします。

「〇〇をしたい」も大切ですが、ここなら頑張れるかどうかを考えてみてはいかがでしょうか。私がそうしたように、職場を訪れたり、働く職員に直接会うなどして、ここなら自分は頑張れるという気持ちを大切にしたいと思っています。もちろん、水資源機構で一緒に働くことができれば嬉しいですよ。

